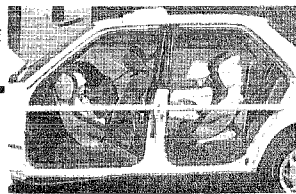


時速50kmで走る乗用車同士の衝突実験の瞬間。チャイルドシートによって、子どもは衝撃から守られている



# チャイルドシートで 子どもの命を守る

自動車に子どもを同乗させるとき、あなたはどうしていますか？ お母さんのひざの上に座らせる。大人用のシートベルトを着用させる。よく見かける光景ですが、どちらも大きな危険がひそんでいます。

## 抱っこで守れない子どもの命

エアバックや衝突安全ボディーなど、車の安全性を高める装置が注目されています。しかし、同乗する子どもの安全についての認識は、十分に深まっていないのではないのでしょうか。

例えば、助手席に座ったお母さんが走行中に子どもを抱っこしている姿を目にすることがあります。このとき、もし衝突事故が発生したら、子どもはどのようなでしょう。お母さんは、わが子を抱きしめて守ることができず、どうしようか？

答えは「できない」です。車が時速40〜50kmで衝突

するとき、シートベルトをして子どもを抱くお母さんの腕には、子どもの体重の約30倍の力が一気にかかります。つまり10kgの子どもの場合、加わる力は何と200kgにもなるのです。大人といえども支えられるものではありません。

小さく軽い子どもの体は簡単に宙に舞い、車内で激しく頭を打ったり、フロントガラスを突き破って車外に投げ出されたりしてしまいます。抱っこするお母さんがシートベルトをしていなかった場合は、お母さんの体が子どもを押しつぶしてしまふということもあります。



それでは、大人用のシートベルトを着用させれば安心かというと、そうではありません。

車に装着されているシートベルトは大人の体格に合わせて作られたもの。いざというとき、子どもの体をきちんと支えられ

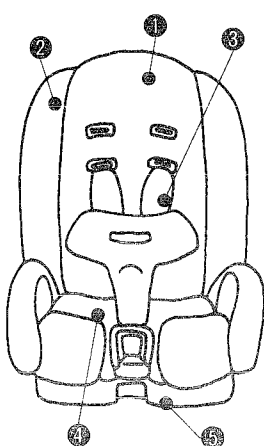
## 事故時の致死率は9分の1に

こうした事態を防ぐためにつくられたのが子ども用のシートベルト装置、チャイルドシートです。

警察庁などの調査によると、自動車乗車中の交通事故でチャイルドシートを着用していた場

▲子どもが抱っこされた状態での衝突実験。子どもは宙に舞い、フロントガラスにたたきつけられた（乗員はダミー人形）

## 安全な チャイルドシート選びの ポイント



①背もたれは、座った子どもの頭を越える高さがあるか。

②横の衝撃から頭部を保護するクッション（サイドサポート）は十分な深さがあるか。

③ベルトの位置や仕組みは、首に巻きついたりしないか。バックルの差し込みはゆるんだりしないか。

④座面が高いものは重心が高くなり、不安定になりがち。

⑤シートの底面積が大きい方が安定しやすい。

合の子どもの致死率は、着用していなかった場合に比べて約九分の一、重傷率では約三分の一という結果が出ています。チャイルドシートを使っていれば防げたと考えられる事故も多いのです。

子どもの体は宙に舞い、フロントガラスにたたきつけられた（乗員はダミー人形）

にもかかわらず、子どものチャイルドシート着用率は約八%（八歳以下の子どもを対象に（財）日本自動車連盟が調査）と依然として低迷しています。「めんどくさい」「子どもがいやがる」という理由で、チャイルドシートを持っていないのに使っていないケースも多いようです。

しかし、万一の事故から子どもたちの命を守るには、大人の役割です。子どもの体格に合ったチャイルドシートを用意し、正しい着用方法でしっかりと座らせる。これが親の本当の愛情であり、責任ではないでしょうか。

## チャイルドシート使用上の注意

チャイルドシートの選択や使用方法を誤ると、効力がないばかりか逆に事故時の被害を大きくする可能性もあります。次の点にご注意ください。

①チャイルドシートの選択

●子どもの体格に合うものを選ぶ。

●実際に車のシートに装着してみて、ぐらついたりすべつたりしないかを確かめて選ぶ。

●運輸省の型式認定ラベルとJISマークがあることを確認する。

②座席への取付

●チャイルドシートのベルト取付位置を子どもの体格に合うよう

うに調整し、車のシートベルトで正しく固定する。

●助手席にエアバッグ装置のある車の場合、チャイルドシートは後部座席に取りつける。やむをえず助手席で使用するときは、座席を一番後ろまで下げ、必ず前向きに取り付ける。

③着用の際の確認

●子どもをチャイルドシートに座らせ、装着したベルトのバックルなどが確実に差し込まれていることを確認する。

④着用中の注意

●必ず保護者同乗のもとで使用し、子どもを乗車させたまま自動車から離れない。



乳児用ベッド  
(0〜12か月)



幼児用シート  
(4か月〜4歳)

- このほか4〜10歳を対象にした学童用シート（ジュニアシート）もあります。
- 価格は1万円を切るものから10万円を超えるものまでさまざまです。  
〈月齢・年齢は目安です〉



「子どもがいやがるからしない」のではなく、小さいときから子どもにチャイルドシートやシートベルトの着用慣れさせ、必要性を理解させることが大切なのです。

米国、イギリス、ドイツ、フランスなど諸外国でチャイルドシートの着用が法制化されているなか、来々、日本でも法律に基づいて着用を義務づけることになりました。

もしものときに子どもの命を守るチャイルドシート。いま必要なのは、わたしたち保護者が「子どもを車に乗せる＝チャイルドシート着用」ということを考え、実行することなのです。

## 「車に乗ったらシートベルト」 大人も必ず着用しましょう

昨年、交通事故で亡くなった人は9,211人。なかでも自動車乗車中の死者が3,972人と最も多く、全死者数の4割以上を占めています。



そのうちシートベルトを着用していなかった人はおよそ65%にのぼり、シートベルトをつけていれば助かったと思われる事故が数多く見受けられます。シートベルトの必要性について、もう一度、考えてみましょう。

①衝突力はビルからの落下と同じ

自動車がつぶかったときの衝突力は極めて大きく、例えば時速60kmで走っている車が壁にぶつかったとすると、その衝撃は高さ約14m（ビルの4階の高さ）から落ちたときと同じです。

②車外に投げ出されることも

シートベルトを着用していないと、衝突の勢いでフロントガラスに激突したり車外に放り出されたりすることもあります。シートベルトの着用には、このような被害をより小さくする効果のほか、正しい運転姿勢を保つことで視界が広がり、安全運転ができるなど事故防止の効果も期待できます。

③乗る人全員が必ず着用

シートベルトはあなたを守る命綱です。「車に乗ったらシートベルト」を合い言葉に、前席、後席にかかわらず、車に乗る人は全員が必ず着用するように習慣づけることが大切です。

④正しい着用こそが命を守る

シートベルトは正しく着用しなければ十分な効果を発揮できません。①腰骨を巻くように ②ベルトはよじれないよう、首にかからないように ③シートを倒さず深く腰掛けるようにして着用してください。

⑤シートベルトあつてこそそのエアバッグ

車にエアバッグが装着されていても油断は禁物です。エアバッグは、シートベルトが正しく着用されていなければ、その効力を発揮できません。